郡家町内を流れる安藤井手

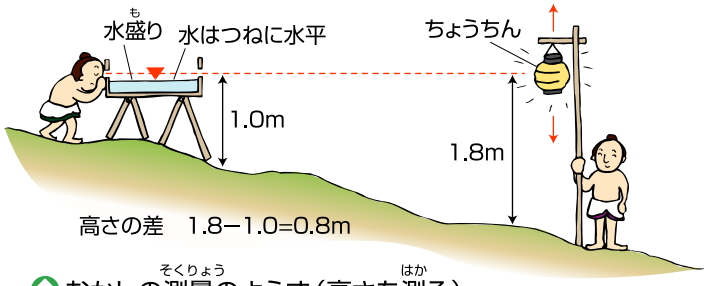
歴史に残る安藤井手

安藤井手は、鳥取県東部にある一級河川八東川を水源とし、国道２９号線と平行して八東町から郡家町にかけて山のすそ野を流れる水路です。その長さは１０.８キロメートルあり、郡家町の水田およそ１０５ヘクタールをうるおす農業用水路です。

その昔、このあたりは「粟とソバの村」と呼ばれていたように、水に恵まれず米づくりができないため、桑や綿、漆やたばこなどの畑作物を栽培し、粟やソバを常食とするまずしい暮らしを続けていました。そしてまずしさのあまり、百姓一揆もたびた

び起こっていました。

　そこで安藤伊右衛門は用水路の建設に乗り出し、１８２０（文政３）年に工事を始め１８２３（文政６）年には完成しました。その後ため池もつくられて、この地域の水不足は解消されました。畑作中心だった農業は米づくり中心の農業に変わっていき、村人の生活は豊かになりました。（「とっとり井手物語」安藤井手を参照）



むかしの測量のようす（高さを測る）

現在の測量のようす

上空から見た仲ノ田ため池とその周辺

伊右衛門の遺言と子孫

伊右衛門は、１８２７（文政１０）年７６歳で亡くなりました。伊右衛門は子どもたちに遺言として、「家が豊かになろうと貧しくなろうとも、気にかけることはしないこと」「お前たちの子どもが豊かになろうと、貧しくなろうとも責任を問わないこと」「家の財産を貯え、安藤井手の管理を行うこと」「自分たちだけのことを考えず、常に地域の人たちが豊かになることに力を注ぐこと」などを伝えていました。

孫の仁平は伊右衛門の教えを守り、久能寺の新田開発を行いました。また、郡家地区の水不足解消のために、通谷に「大つつみ」と昔呼ばれたため池も１８６０（安政７）年につくりました。そして長さ３,４７０間（およそ６,２４６メートル）の水路をつくり、久能寺御建山にため池の水を引いて山林を開拓し、１５町歩（＝ヘクタール）の水田をひらきました。

鳥取藩は、仁平に「因伯百姓頭」という、当時としては栄誉ある称号を与えました。その後仁平は、因幡湯山池（現在の福部村）の干拓や伯耆の国長者原（現在の岸本町、

「とっとり井手物語」佐野川を参照）の開拓にたずさわるなど、因幡・伯耆両国の有名な開拓や水利事業に力を注ぎました。こうして仁平の名は国内外に広まり、遠く伊勢国（現在の三重県）まで出かけて水利事業にたずさわったそうです。

遊歩道から見た仲ノ田ため池

収穫をむかえた柿畑

まぼろしのため池

現在国道２９号線のそばにある仲ノ田ため池は、ため池の下流の水田に水を送る目的で、仁平が手がけた２つ目のため池です。最初、今の仲ノ田ため池からおよそ２００メートル南東側に「上のつつみ」と呼ばれたため池がつくられ、久能寺御建山に新しくつくった水田に水を引いていました。現在の八頭高等学校の敷地が畑であった頃、「上のつつみ」の水は御建山水路として、この地域の畑を水田へと変える大きな働きをしました。

しかし、１９６１（昭和３６）年に現在の国道29号線が建設されるとき、この「上のつつみ」のほとんどが国道の一部として埋め立てられ、さらに一部残ったため池のあとも、建設会社の工場敷地となって埋め立てられてしまいました。

こうしてため池はなくなってしまいましたが、国道の工事の時に安藤井手から直接御建山水路に水が流れるように工事が行われ、御建山水路は大迫の地を経由して郡家西小学校の校庭を取り囲むように流れ、久能寺地域の水田に水を送っています。

現在では、仲ノ田ため池を取り囲むように「オアシス公園」がつくられ、住民のいこいの場所となっています。そして、仲ノ田ため池の水が流れる水路のまわりには、新しく家が建ち並び昔の様子をうかがうことはできなくなってしまいました。しかし、大切なことは、今の私たちの生活が、水を引こうとした先人達の苦労と努力に支えられていることに気づくことです。今でも郡家・宮谷集落の人たちは、毎年田植えのあと安藤家の墓前に集まり、その業績をたたえ、お供えとともに感謝の心をあらわしているそうです。

仲ノ田ため池周辺の案内図

干し柿をつくるようす